

第一章 生命的基調

どの時代にもその時代を彩る時代の基調というものがある。古代には古代のそれ、中世には中世のそれ、近代にも近代のそれがあり、中世と近代の間に挟まれ、両者の時代色を色濃く宿したルネサンスにもそれはあった。そしてその色たるや、やはり独自の色調を帯びていた。

中世の、神の相の許に一心に神智を志向する世界に対しては、世俗的な人智を旨とする世界が、また自然科学が発達して物事の因果関係を重視する近代に対しては、類似や照応関係を主眼とみなすアナロジの世界が、ルネサンス期の特徴と言えよう。

この二つの中で、類似・照応的思考は本章でも多少触れ第三章で大きく扱う魔術の知の骨子である。また人智の方は第二章で取り上げる人文主義の一大特色であるが、その場合、少し先取りした言い方になるが、その人智を以てして真に人間を捉え切ったかどうかは疑問に思える。たとえば十五世紀後半のフィチーノの活躍した時代の人間哲学が、ありのままの生活感あふれる人間を描きえたか。人間は解釈したにせよ、それは人間的な人間はどこのVといった抽象化された理想像を解明したにすぎなかったのではなかったか。現実の人生身の人間はどこかに置き去りにされなかったか。

フィチーノやピッコの述べる人間とは、私たち食事をし排泄をする現実の人間とかけ離れていたと思われる。そこには理想的もしくは英雄的人間がいて、またそうした者の有する聖なる生命はあるが、生活臭に満ちた地べたを這ってでも生きていく雑草のような生命観は感じ取れない。仰ぎ見、夢想する対象としての生命はあるが、いっしょに汗だくになって生きていくこの手で触れうる生命はない。

ルネサンスの人間哲学がすべてこのようなものでももちろんないが、この傾向がわりと支配的である。

本章ではこれとはちがって、触感的で肉感度の高い人生身の人生身のたる人間像を提示して、概念的でない直接的な生命が脈打っていたことを示したい。

そうした生身の生命主義こそ、ルネサンス期の最も重要な基調なのである。まずその基調音がすでに中世末期に息づいていたことを明かしてみよう。

1 人生身を食う話の視座

十三世紀末に編まれた、作者・編者が不詳とされる、俗語(トスカナ語)による最初のノヴェッラ(短編物語)集『ノヴェッリーノ Novellino』の第六十二話は、いわゆる人生身を食う cuore mangiato話である。より正確に言えば、六十二話の前半部がそれに相当する。

このテーマの話は、後のボッカッチョ作『デカメロン』四日目第一話と第九話においても叙されていて、こちらの方が有名であろう。さらに、『クシーの城主とファイエルの貴婦人の話』と『トゥルバドゥール評伝』中のギョーム・ド・カペスタニーの「伝記」の二つも、このテーマを扱っている(後者の「伝記」を基にして『デカメロン』四日目第九話が書かれた)。

本書ではこれまであまり取り上げられてこなかった『ノヴェッリーノ』第六十二話を読み解いてみる。

肉体———心臓

まず第六十二話を試訳してみよう。

第六十二話 ロベルト殿の話がここに語られる。